

## 資料：グループ支援者の感想

---

「教育の最新事情」(必修12時間)には、以下の20名のグループ支援者(入江を加えると21名)が関わった。そのうち、15名から感想が寄せられたので、ここにまとめて掲載する。

飯田 薫	(卒業生教員)
澤田 敏志	(卒業生教員)
田中 すみ子	(卒業生教員)
千田 晴久	(卒業生教員)
成島 烈	(卒業生教員)
吉川 純	(卒業生教員)
渡邊 一郎	(卒業生教員)
石川 勇喜	(非常勤講師)
小林 一彦	(非常勤講師)
鈴木 浩	(非常勤講師)
関 範夫	(非常勤講師)
高橋 和男	(非常勤講師)
本間 利夫	(非常勤講師)
小藤 俊樹	
岩澤 啓子	(教職課程)
大西 勝也	(教職課程)
荻野 佳代子	(教職課程)
関口 昌秀	(教職課程)
古屋 喜美代	(教職課程)
間山 広朗	(教職課程)

## 更新講習に参加して

飯田 薫

平成18年に教育基本法が約60年ぶりに改正された。翌年1月、教育再生会議第一次報告で、教育3法の改正が提言され中央教育審議会がこの提言を参考に審議し、3月に答申が取りまとめられ、教育3法案は国会で審議・可決され6月に公付された。この改正の一つとして、教員免許更新制が導入され、教員免許状の有効期間の設定とその更新が義務付けられた。

昨年8月に、神奈川大学で教員免許状更新講習がおこなわれた。私は卒業生教員として、グループ支援者という立場でこの講習の進行のお手伝いをさせていただいた。講習参加者の対象年齢は基本的に33歳、43歳、53歳の先生方である。また、職種も私の担当したグループは小学校・中学校・高等学校の教員であり、県立・市立・私立学校といった多様な学校種の先生方が参加した。講習のはじめは皆緊張していたが、最初に自己紹介をしてくれた先生が、アイスブレイキングを実施し、和やかな雰囲気を作ってくれたおかげで、参加者の人柄がよく分かった。私は、全員の参加者に対し、自己開示と他者理解の構成を大切にしながらグループ協議の進行を心がけた。「教職生活のふり返し」として各先生方は、準備したレポートを手元に置きながら、「自分が大切にしてきたこと」、「転機になったこと」、「現在抱えている問題」等について自己の教職生活をふりかえりながら話をした。同年齢の教員を対象とするライフステージに応じた官制研修等と異なり、経験年数や学校種の異なる教員が、それぞれの教育環境で、諸問題の解決に向けてどのような苦勞をされてきたか等の実践報告をした。

報告の主なものとしては、各学校の児童・生徒たちの実態や、時代の変化に伴う保護者への対応策の苦勞等、現場に戻り大変参考になる内容であったと思う。また、若い先生からは、現在直面している課題に悩みながら懸命に取り組む積極的な姿勢がうかがわれ、多くの先生方の心を揺さぶったことと思う。これはその時の先生方の表情からも見て取れた。さらに、何校かを経験したベテランの先生からは、マニュアルどおりにいかない難しさや柔軟な対応の重要性が報告された。

このように、グループの参加者全員の話は、新鮮で他の参加者の興味関心をひく大変中身の濃い内容であった。また、その後の質問も積極的におこなわれ、予定していた時間はあっという間に過ぎ、先生方の表情からも充実感が見て取れた。後日、講習参加者の「講習をとおして見えてきたこと」についてのレポートを拝見したが、同様な感想が目立った。

今回の講習会をとおして、児童・生徒の発達段階に応じた教科指導、生徒指導また学校運営等の課題や成果が、小・中・高の連続性の中から見えてきた。

最後に、この講習の進行のお手伝いをさせていただき、大変貴重な体験ができたことを神奈川大学関係者に感謝申し上げたい。

## 「ラウンドテーブル」グループ支援者雑感

田中すみ子

「教育は理想の追求」。ラウンドテーブルを振り返ると、これが究極の結論であったと思われる。異校種、年齢や地域の異なる教員でのグループ討議は、大変有意義なもので、受講者のみなさんにも好評であった。少人数のグループ編成としたため、一人一人が自分の振り返りや思いを十分に語る事ができたということも、受講者の高い満足度につながったのではないかと考える。

現場での研修は、学力向上のための教科の指導法や生活指導の事例検証が中心であり、いわゆるノウハウ的な要素が強い。しかし一方で、成育歴や家庭環境に起因すると思われる生徒の実態がある。他とのコミュニケーションがとれない生徒が増えている中で、もはや教員としての役割を越えた指導を求められているのも現実である。そのような状況の中で、教員自身の「振り返り」という取り組みは実に画期的である。いわゆる「実績」と言われる輝かしい経歴ではなく、心の引き出しの奥においってしまったようなことを伝え合い、互いに「なる程」、「やっぱり」と共感することにより、今後の教員生活への糧となったに違いない。

私自身、英語科の教員として、英語を通して豊かな人間性を育みたいと研修を重ね、授業力向上に取り組んでいるが、目の前の現実、SOSを発信している生徒や保護者への対応に追われる日々である。教科の専門として教員になった中学校教員にとっては、急速に変化している生徒の実態、16人に1人が何らかの発達障害を抱えているという状況に戸惑いを感じているのもまた事実であり、教育相談や臨床心理に関する研修の必要性を感じている。最近の問題行動は、反社会的なものから、非社会的なものがふえている傾向がある。生徒一人一人に向き合って、じっくり話を聞いてあげたいのにその時間が取れない。子育てに悩む親はそれを学校や教師のせいによって、自分を責めることから回避したがっている。

「教員の資質とは何か」、「教員の役割とは何か」を改めて考える機会となった今回の教員免許更新講習のラウンドテーブルは、受講した教員にとって有意義なものであったと確信している。

## 学びあいの原点

千田晴久

### 1 教師が抱えている課題とは

現在、教師にとって最も厳しいことは、失敗が絶対に許されなくなっているということである。ベテラン教員でも失敗はある。ましてや若手教員が失敗しないはずがない。

しかし、失敗は許されないのである。下手をすると教師生命の命取りになることさえある。ゆとりのない環境はストレスを生み、人間関係の悪化を生む。各自が自分のことで精一杯で、お互いを支え合うことが難しい状況になってしまっている。このような中で、教師としての自分のあるべき姿を思い浮かべたり、自分としてめざすべき教師像を見つけることは、非常に難しいと思われる。

### 2 オープンマインドな研修は教師の活力を生む

今回の免許更新者を対象とした研修は、スキルや方法の習得を目的としたものではなく、各自の自己開示から始まる、オープンマインドな研修であったと思う。それぞれの教師が抱えている課題や生徒や学校に対する思い等を熱く語ることができた。課題や思いは解決しなくていいものである。語ることによって理解や共感をしてもらうことが、これからのエネルギーとなるのである。多くの教師の具体的な思いを身近に感じることによって、教師は自分自身を見つめ、振り返ることができ、教師は理論家ではなく、実践家なのである。熱い具体的な体験談は、教師の心を熱くする。今まで見えなかったあるべき教師像が見えるきっかけとなる。

### 3 新たな研修の在り方について大学の役割

オープンマインドな研修こそ、大学にぜひお願いしたい研修である。大学には教職をめざす学生達が大勢学んでいる。学校で教鞭をとっている教師が、これから教職をめざそうとする学生とディスカッションする機会を多く持つことができたら素晴らしいと考える。教師にしてみれば、自分の実践や体験を学生に語るができる自己開示の良い機会である。学生としても、現場の教師の生の体験談を目の当たりにすることができる絶好の場である。お互いが熱く語り合うことが、明日へのエネルギーとなる。教師には、生徒には語れない自分の教師としての在るべき姿や、自分がめざすべき教師像を語る場が必要である。これを教職をめざす学生達と共有しあうことが、お互いに成長する大きなきっかけとなると思う。この様な形態の研修は、若手教員の研修にも大いに役立つのではないかと考える。語ることによって本人も多くを学ぶことができる。自己を見つめ直すよいきっかけとなるはずである。

この様な各年代層と大学の学生とのディスカッション形式の研修をぜひ、実施して欲しいと考える。できれば、あらゆる校種の教師とともに実施できる研修を期待する。

## 教員免許更新講習を終えて

成島 烈

昨今の教育環境の変化は目まぐるしいものがあり、生徒の変化も例外ではない。個性の尊重が叫ばれている今日、昔からの良しとされていた教育活動や生徒指導の手段が通用しなくなっている。

温故知新という言葉にもある通り、教職に就いている者が今までの道のりを振り返り、見識を新たにするために講習を受けるという意義は十分に理解できる。ただ、講習を実施する立場にとってみれば、何をテーマに、何をどのように、何をどれだけ行っていけば良いのかが問題になるのだと思う。

今回、更新講習をお手伝いさせて頂いたが、正直なところ不安な面が大きかった。講習当日に初めて顔を合わせ、しかも、分野が小・中・高・特別支援と多岐にわたり、教職経験年数も10年から30年と幅が広い。グループのまとめ役の私は、私学勤務という限定された中での経験しかない。果たして討議が成り立つのか、お互いに定められたテーマについて、自己報告をするだけで終わってしまうのではないかと胃の痛む中で講習を迎えたのである。

しかし、当初の不安は杞憂であった。それぞれのお立場での先生方のお話は、私には新鮮なものであり、また、共感できるものであった。これは、私のグループに同席されたすべての先生方の共通のお気持ちであろうと思っている。そのため、討議は活発に進められ、質問も多く、所定の時間を超過することもしばしばであった。討議を進めていく内に、私自身が勉強させて頂いていることに気づいた。

教員は各自の信念に基づいて生徒に接しているが、その信念は、その教員の自己満足に終わってしまう危険がある。それは経験を重ねていけば行くほど「これで良いのだ…」となってしまう。大事なことは「これで良いのか？」を考えていくことなのだ。情勢の変化は激しい。生徒の変化も激しい。私が生徒の時分に経験したことが、30年も時を隔てた現代の生徒には通用しない。下手をすればこのまま自己満足という鎧を身にまとい、「昔は良かった…」とぼやく自分になりかねない。将来、恙なく教員生活を終えてみた時に、自己満足の足跡しか残されていなかったら、何のために自分は教職に就いたのか分からない。いかに現代の生徒を理解すべきか。いや、いかに現代の文化を理解すべきか。その手助けとして今回の講習に参加できたことを嬉しく思う。

政権が替わり、教員免許更新が廃止される。それはそれで結構なことだと個人的には思うが、今回のような免許更新のための講習ではなく、自己のスキルアップを図るための講習として何らかのものがあれば嬉しい限りである。

## 更新講習の支援者としての感想

吉川 純

今回の支援者としてのお話をいただいてから、「自分で良いのだろうか?」「ご迷惑をおかけするだけでは?」という不安がほとんどで、当日を迎えました。

もちろん、昨年夏に卒業生の教職経験者の話し合いに参加させていただき、支援者での模擬講習(?)を体験はしていましたが、その中でも自分の経験は、自分にとってはごくごくありふれたものでした。私の事情で直前の打ち合わせにも出席できず。不安の中で当日を迎えました。

参加者の年齢や中学校、高等学校(全日、通信)、養護学校と校種・職種の構成など工夫がされており、和やかな雰囲気の中、自己紹介からラウンドテーブルに入りました。

話は、学習課題を抱えた生徒たちへの対応が中心となりましたが、忙しさに紛れてとり辛くなっている職員間の連携の大切さも、浮き彫りになってきました。また、モンスターペアレントに代表される、保護者との対応の難しさも校種・職種を超えた共通の課題であることも再確認できました。

先生方の体験を縦糸とするならば、話し合うことで横糸が入り、ラウンドテーブルの内容が厚みを帯びた織物ようになってくる不思議な体験ができました。

講義1の関口先生の、「測定できない学力を学校で身につけさせなくても良いのか」の指摘には、形成的評価(「～ができる」を評価)に重点を置いてきた私としては、目から鱗が落ちる思いでした。講義2(二日目)の間山先生の講義は、「等価交換としての学び」が、受講生にはインパクトが強く、言い得て妙だとの声も聞かれました。講義3の両角先生の「学校づくり」のお話は、学校をどう作るか、いろいろな人の協力なくして学校ができ得ないことを再確認する機会となりました。講義4の古屋先生のお話は、課題をかかえた子どもたちに直接関わる内容で、もっと詳しく聞きたい、時間をとって質問をしたい、と言う受講者の声が多かったです。

最後の「グループでのふり返し」では、教職員をふくめたおとなのチームワークの大切さ、特に「教職員間が一枚岩(板)となり、協力し、生徒へ適確に支援していくこと」がまとめの課題(宿題=お土産)となりました。

この感想を読み返してみると、支援者というよりは、受講者に近い立場で参加させていただいたように思います。一月前に私の事情で精神的に落胆していたところでしたが、受講者の皆さんの、「2学期も頑張るぞ」の意気込みに触れ、「負けていられないぞ。」と元気が出てきた講習になりました。このような機会を与えてくださった入江先生をはじめ神奈川大学教職課程関係の先生方に感謝をし、感想とさせていただきます。

## 振り返り

渡邊 一郎

先日、教員免許更新講習に関わらせていただきました。多くの参加者の先生方から沢山の意見をお伺いし、エネルギーを頂きました。免許更新講習の是非は別として、教科指導・生徒指導・部活指導・保護者対応等、教師を取り巻く環境は日々忙しさを増しているかと思われます。周りと協調しながらも、自らの指導方針を持ち、生徒の方向性を示していかなければならない事を念頭に対応してきたつもりでいます。そんな経験を持ち寄り、振り返り、今後の教職生活に生かしていくことは、とても有意義なことだと思います。

それぞれ職場環境や経験年数が違う小グループで、テーマを持って、語り合う事は近頃、職場ではあまりみられない光景、実は職場で必要とされる経験なのではないかと言った意見もお聞きしました。「教員が学び合う」環境を作ることは、とても至難となり、例え、研修会を設けても参加する方は、あまり熱心になれず、仕方なく参加している状況もあるようです。そういった現状を踏まえ、昔の職員室を思わせる語り合いは、ある種の懐かしささえ感じられました。若い先生方に話してくれたり、相手をしてくれる先生方の存在も思いだしてしまいました。教員サイドが心に余裕を持って、周囲と触れあうことが必要なのではないか、勿論、教員対教員の仲でも、少しの余裕を持ち、相対していけば、互いの向上あるいは励まし合いに通じるようになるのではないかと思います。コミュニケーションが必要とされるのは、生徒ばかりではなく教員同士や職員室でも求められているのではないのでしょうか。

政治的な change で更新講習が終わってしまうことは残念だと思います。政策が大きく変わる事はいいのですが、10年一区切りと考え、更新を我々は必要としているのかという議論はまだ続くのではないかと思います。時々、マスコミや新聞紙面を賑わすような事件がある度に教員の資質が問われる昨今です。教員数も多くなるといくら管理職が多くても把握しきれない現状もあるのではないのでしょうか。これからも一部の心ない教員によって多数の教員のステイタスが問われる事がないように期待しています。それから、本来の教員の業務以外のことが年々多くなり、身体的にきつい業務内容となっています。心にゆとりを持ち、生徒に接することができるようにしていきたい。限られた時間を有効に使っていくように改善していく事も必要なことといえるのではないだろうか。今回の更新講習に参加し多くのことを考えさせられました。

これからの教員生活に生かしていきたいと思っています。

## 2009年教員免許状更新講習に参加して

石川 勇喜

教育現場の先生方と直接向き合って話し合える絶好の機会として、今回の講習に参加できることを楽しみにしていました。私が担当した班は6人の先生方で校種、教職歴、年齢、性別も異なり、それぞれの立場から現在抱えている課題や悩みを率直に出し合って意見交換をしました。

初日の参加者が自分の教職生活をふり返る「ラウンドテーブル」では、先生方一人ひとりの思いや願いがこめられた発表で、白熱した意見交換ができました。その中で、現在抱えている問題で特に印象に残ったのは、30代の先生方からは、学級づくり、保護者対応、授業作りや勉強のための時間確保、40代の先生方からは、教職生活を取り巻く環境変化への対応、50代の先生からは、時代とのギャップ、自分自身の固くなった思考、クラスの生徒の対応、発達障害児の対応、若手の育成などでした。それぞれの世代の違いから抱えている問題は様々ですが、どれ一つとっても教育活動にとっては重要な課題であり、正面から向かい合って取り組んでいかなければならないことです。参加者全員が自分の意見や考えを述べ合って意見交換しているのを聴いて、本当に先生方は児童生徒と向き合い、それぞれの学校で精一杯努力されて取り組まれていることがわかりました。

今回の「ラウンドテーブル」は、参加者自身が自分の考えや意見を話すことができ、またそれについていろいろな意見をもらえ、とても有意義なことだと思いました。実際に参加者も3世代の教員の意見を聞くことができ勉強になった、それぞれの立場で経験してきたことや考えていることを語り、聴き合うことは非常に有意義であった、教育の中心にあるのは人間であることが確認できた等、とても自分自身の勉強になったと話されていました。

2日目は講義中心で、十分なグループ討議はできなかったが、最後のグループ討議の時に、最初の自己紹介で自分は今回の研修には参加したくなかった、と話していた先生も自分自身の悩みや課題を話し、意見交換しているうちに、今回の研修に参加して様々な立場の先生方から、話を聴くことができ良かったと話されていた。

最後に全体を振り返ってみて、教員免許更新講習が現場の先生方に必要である、というなら、国の政策として、予算と時間を確保して実施すべきものであって、更新者が自己負担をして、いやいや講習をうけるのでは意味がないと思いました。担当した班の先生方から、現場の悩みや課題を話せた「ラウンドテーブル」のような研修はとても有意義であり、参加して良かったという一言はともうれしく思いました。

## ラウンドテーブルから見たこと

小林一彦

紆余曲折の末の「教員免許更新制度」。大学側が講習を引き受けるについては、様々な懸念、課題が指摘されたであろう。やるからには「受講者から受けて良かったといわれるような」講習、「自ら教職への新たな意欲と力につながり、明日からの教育実践に生きる」講習にしようと、学内で知恵を絞って企画し、練り上げたものであろう。その中から「ラウンドテーブル」方式が生み出されたと理解している。

ラウンドテーブルの「支援者」としての体験から、見たこと、感じたことを少し記しておきたい。

(1) 「省察」(教職生活の振り返り)を通して教職への意欲を再喚起することは、更新講習の第一のねらいであった。ラウンドテーブルでは、教員としてのこれまでの歩みを振り返り、どんな壁にぶつかり、どんな喜びや充実感を得、そして今、何に悩みどんな課題に直面しているか、「赤裸々な自分」を互いに語り合う。

荒れた生徒、めげそうな自分を奮い立たせて、毎日生徒と真向う教員。指導法に迷いながらも、今やっと自分の取組に確かな手応えと自信が持てるようになってきた教員。ストレス多く切れやすい子どもたちの現状の中で「もっと子どもたちを信じる」学級経営を模索する教員。学力向上を最重点とする進学校で、部活の両立、個性と信頼関係を大切にした指導に取り組む教員。基礎学力不足や家庭事情を抱える生徒へのきめ細かい指導に心を砕き、公立とは違った経営的感覚も要請される教員。

普段経験できない異校種の教員とのグループ研修・ラウンドテーブルは本当に貴重だと受講者からの感想が多い。異校種、異年齢の男女教員や支援者が、互いの悩み、思い、願いをシェアすることによって、「教職生活の振り返り」はより深められる。

悩んでいるのは自分だけではない。こんな努力をしている教員もいるのか。もっと広い違った視点から見つめ直せる。子どもたちの成長と課題を、小中高を通した長いスパンで捉えることができる。そして、なによりも、忙しき厳しきの中で、忘れかけていた初心が蘇るとともに、教員としての自分の今現在の立ち位置を心に刻むことはできる。

(2) ラウンドテーブルから見えるのは、教育改革の対応に追われる教員の姿であり、高邁な理想を語る前に、目の前にいる子どもたちの課題解決に悩みながらも必死で取り組む教員の姿である。強まる管理、保護者対応。もっと欲しい生徒との触れ合い、教材研究の時間、教委からの支援。教員として力量不足も痛感、本当はもっともっと受けたい実践に役立つ研修。見えてくるのは、こうした「教師」としての思いであり願いである。

ラウンドテーブル方式は、受け身の「講習」を積極的な「研修」に変えることができる。

教員の願いと教育現場の声を生かした参加型・双方向型「研修」にすることができる。「ラウンドテーブル」から発信されることは、もっと多様にあると思う。

## 免許更新講習を経験して考えたこと

—なぜ、受講者の評価が高かったか？—

鈴木 浩

今回、更新講習を受講した教師たちからの評判が非常に高かった。「更新講習という制度には賛成できないが、今回の講習はよい研修となった」「また、機会があったら参加したい」という声が多数聞かれた。こうした声が聞かれた背景に、教師は学びたいという気持ちがありながら、なかなかその機会が与えられていなかったということが考えられるのではないか。さらに、教委等のいわゆる「官製研修」に対して、「つまらない」「役に立たない」といった負のイメージがあったのではないか。

これに対して、今回、神奈川大学が提供した講習（一種の研修と捉える）は、普段教師が受けている研修と何か違ったからであることが予想される。では、一体何が違っていただろうか。

まず、われわれが参加している教委等が行う研修を思い出してみよう。こうした研修は、指導主事レベルの企画・立案したものが多く、内容的な専門性が低い場合も多い。大学の研究者を呼んでくる場合は、内容的にある一定の専門性は保障されるが、講演のみのケースがほとんどで、一方通行の研修となる。また、研修テーマも一方的に設定されたものとなっていて、必ずしも受講者の興味や学校の今日的な課題に合致しない場合も多い。さらに、教育研究会の各部会に「丸投げ」の研修も多く、そういう場合は、現場教師が多忙中で、なんとか運営している実情があり、研修相互の関連などが考慮されることは少ない。

これに対して、今回の更新講習を比べてみよう。文部科学省からの指定された内容の範囲の中で、非常に工夫されたメニューが用意されたことが、まず、ポイントといえる。研究者の視点から、学校教育が抱える今日的な課題を捉え、それを事前に「現場の支援者」と相談をしながら、講座を設定したことが、講習全体の流れを用意した。

次に、「支援者」の存在である。教員のOB、現職の教員が支援者として加わったことで、研究者の講義も「腑に落ちる」ことになった。実際に現場で働いていた、また、現に働いている仲間のサポートは、受講者に安心感を与えることになったと思われる。

そして、何よりも大事なことは、受講者が自らについて語ることが、この講習のメインであったことであろう。自らが主人公の研修場面が組み込まれることで、講習全体への参加意欲が飛躍的に高まったということができると思う。自らが語る時間を保障されていること。それを受け止めてもらえることの喜び。参加者が相互に敬意をもって学びあえる場。こうしたことが保障されたことを評価が高かった要因であったと考えたい。ベテランの受講者が、自身の教職生活を「まるごと」伝えるとき、そこに教師としての誇りや自信が滲み出てきて、自然に参加者相互に尊敬のまなざしが交わされるラウンドテーブルが出来あがった。

今回の講習は、受け止めること、伝えること、まとめることの連続であったとも言える。それを、受講者、支援者、講師全てが立場を変えて相互に行ったことに、これからの教員研修のあり方のヒントがあるようにも感じた。

## ラウンドテーブル進行の感想

関 範 夫

まず大きな成果を挙げた今講習会の企画の素晴らしさに感謝したい。特にラウンドテーブル設定は、受講生に意欲を与え、進行をやり易くするものとなった。感想を簡単にまとめてみた。

### 〈受講生の真面目さ〉

事前に各自が用意した「教職生活をふり返って」の内容を読んでも、いかにも教師らしい几帳面さが伝わってきた。討論に入ってみても本物であった。話し合いを重ねる毎に、誰もが真剣に取り組む姿勢は嬉しくもあり頼もしいものであった。

また、区切り毎のレポートにも熱心に記入していた。近年はパソコン入力が大半になっているが、手書きはいい経験になったようだ。そのためか、国語辞書を持参した方がいたことが印象に残った。

### 〈日頃の交流のなさを痛感〉

わがグループのみならず全ての受講生が異口同音に発したことは、こうした情報交換がよかったということである。裏を返せば、日常生活において如何にかけているかということである。20年程前から自分なりに危惧していたことは、校内において先生同士のさりげない交流が少なくなってきたということであった。ベテラン教師、中堅教師、経験浅い教師、それぞれの持ち味や役割があるはずである。ところが、理由は数多くあろうが、昔と比してコミュニケーションが極端に少なくなっていることは事実である。「現職教育」という言葉さえ死語に近くなったと感じている。

こうした現実の反動からか、グループの先生方はまるで「水を得た魚」のように活発に話し合い盛り上がった。学校内における交流のなさを悩み問題視する発言も多く出された。

さらに、他校間との情報交換や連携も十分ではない。ましてや、異校種間の連携は皆無に近いようである。児童生徒の発達段階を理解するには必要不可欠という捉え方を再認識したことは大きな収穫となったようである。

### 〈受講生の嬉しい感想〉

現実の厳しさや苦悩する教師等、話し合いは盛り上がったが、誰もがプラス思考を持って終了したことが嬉しかった。日頃、弱音や愚痴、悩み等を話し合う機会がないようである。今回十分とは言えないが少しでも飾ることなく胸のうちを吐露できたようである。このことで、自分を見つめ直し希望を掲げる契機になったことは嬉しい限りである。

「教師になった初心を思い出した」「子どもを愛するという原点を忘れていた」「苦悩しているのは自分ばかりでないことが分かり、意欲が沸いてきた」「改めて教師の使命の重さ尊さを実感した」「自己再生へのスタートとしたい」等々、わずか二日間であったが、教師魂が目覚め、磨かれたことは事実である。

そして、「神大のような講習ならば、他の先生方にも受けさせてやりたい」という全員の感想は、この講習会を企画運営された先生方へのご褒美と思われた。

## 充実感のもてる研修の必要性

高橋 和男

今回、神奈川県大学における教員免許状更新講習の講習支援者として参加し、グループ討議にかかわる中で、あらためて「教員生活の振り返り」の大切さを痛感した。

私の担当したグループ（5名）の各所属校は、公立高校2、公立中学校1、公立小学校1、私立中高校1であった。また、経験年数を見ると10年次研修2、20年次研修1、30年次研修2と多様であり、それぞれの経験や立場に立っての意見交換や、各自の振り返りが報告された。

「教員生活の振り返り」では、これまでの経験をあらためて振り返ること自体が、自分自身の実践に対する評価や今後の各自の課題を発見するために大切なプロセスであったようだ。しかも、グループ内で異校種、異年齢の多様な経験を交換し合うことで、「視野が広がり、今後の教員生活に生かせる成果があった。」という感想も聞かれた。校種による課題の違いもあれば、共通の普遍的な課題もあったが、常に指導技術を向上させていくことの必要性や、校内における自分の位置づけの変化に気づきその立場にふさわしい動きを求められること、気迫と丁寧さを兼ね備えて指導に当たることや子どもを信じほめることなど、教師としての基本的姿勢をあらためて見直し、確認できたようである。

また、各講義を聞いた後の意見交換でも、それぞれの聞き方や解釈、経験の違い等からくる個性ある考え方を交換でき、各受講生の研修成果の幅が広がったように思う。

受講者アンケートを見ると、レクチャー—辺倒の受身的講習だけではなく、一人ひとりが主役になれて、話し、聞き、意見を交換できる今回のような小グループによる形式が、非常に効果的であることがわかる。

教員免許状更新講習の今後の存続は微妙であるが、学校現場が多忙な中であっても、受講者が充実感をもって終わられる研修の企画が求められていることを実感した2日間であった。

## 教員免許更新講習を終えて

本間利夫

本年度神奈川大学の教員免許更新講習に関与できたことは、何よりも私自身が学び考えることが多くあり、このような場を与えていただいたことに感謝いたします。以下感想のいくつかを述べてみます。

### 1 良い評価を得られた原因は何か

一言でいうなら今津さんのいう「経験省察型学習スタイル」(岩波ブックレット『教員免許更新講習を問う』p.59)を採ったことにあると思う。具体的には、教師生活の振り返り、ラウンドテーブル、具体的・実践的な講義内容、講義後のグループ討議、グループ支援者に学校現場経験者をあてたことなどが参加者の受講満足度を高めたことは参加者の感想からわかる。企画された入江先生に頭が下がる。

### 2 現場の教師は話し合いを欲している

参加者が当初予想したよりも自分の思いや悩みをさらけだし語り合いが盛り上がった。私の班の55歳の参加者が「こんなに自分が話せるとは思わなかった」と語ったのが象徴的であった。裏返せば、いかに今の学校現場では教員同士の本音の語り合いがなされていないかということである。教育改革の名のもと競争原理、成果主義など強まる教員管理の中で一人ひとりが分断されている証であり教育界に身を置いた者として責任を感じる。

### 3 異校種間の情報交換の大切さ

ほとんどの参加者が良かった点としてグループ構成が異校種メンバーであったことをあげた。高校生は小学校、中学校教育があつての今であり、小学生の近未来が中学、高校教育であることを改めて確認し情報を交換できたことは、参加者の今後の実践に必ず役立つ。これまでの官製研修にほとんど無いのが不思議である。大学が仲介して縦に結びつく研修を企画することができることが実証されたといえる。

### 4 学校管理職こそが研修のあり方を研修しなければ

校長、副校長の仕事に教員の力量や意欲を高めることがある。その場合、校内研修は重要な機会である。ところが本当に充実した研修がなかなかできていないのが現状である。今回の講習の成功を体験し、研修責任者である管理職がもっと研修のあり方について学ぶ機会をもたなければの思いを強くもった。教育課題別はもちろん年代別の研修をいかに有効に行うかが学校管理職の責務である。とくにひしめく50代教員については、官製研修はほとんどない中で、いかに彼らに「学校でのまとめ役」としての役割が発揮できるよう定年まで自己研鑽をとげるための校内研修ができるかは学校経営の重要課題である。大学もそのための協力者となりえないか。

## ともにグループ学習をつくり出す支援者となって

小藤 俊樹

### ①支援者の依頼を受けたときの自分の思い

誠に勝手なことながら、自分自身の教員生活を振り返り、また、異校種の教員と交流することで、自分自身が成長できるような、そのような「場」になるならば、との思いから引き受けた。

### ②支援者の役割について

今回の支援者の役割については、事前の打ち合せまでやや不明瞭なところがあった。それは、支援者はグループワークの司会者なのか、リーダーなのか、アドバイザーなのか、ファシリテーターなのか、という点である。支援者と言っても、大学の教員（教員経験者の非常勤講師を含める）、大学の卒業生で協力する教員、そして私のような大学に関係のない現職教員など様々な立場から集められている。また、特に今回の講習のためにグループワーク研修を受けているわけでないので、致し方ないところがあったが、結局は、プログラムの進行を守れば、あとは「それぞれの支援員がやりやすいようにやる」というアバウトな指示が出された。そのため、それぞれの支援員が自分のスタイルで講習を進めることとなり、結局はそれが功を奏したのだと思う。私自身は受講者が教員生活の振り返りを発表し、意見交換を行う場面はファシリテーターとして、また、最後に支援者自身が教員生活の振り返りを発表し、質疑応答する場面では、自己啓発の事例提供、及び、学習者の皆さんの発表に係わるアドバイスをを行うアドバイザーとしてグループワークに係わることにした。

### ③グループワークでの工夫

学習者同士は初めて出会う方ばかりであり、自分の教員生活を振り返る（＝自己公開）ということから、出会いの場面を重要視し、ワークショップのはじめによく行われるアイスブレイキングと呼ばれるアクティビティーを用意した。緊張感を解き、メンバーの人柄を注意深く観察し、想像することができ、人間関係をつくる「準備運動」としては効果的であった。

### ④講習を終えて

受講生の皆さんは、教員としての自分を成長させてくれたり、教員生活を送る上での心の支えとなっている、自分なりの「座右の銘」や語るべき「エピソード」を持っていた。一緒に語った仲間として、これらの「言葉」を交換できところに、受講生の満足度が高かった要因があるような気がする。また、本来は校内で共有すべきこれらの貴重な「言葉」が、現在、共有できていないところに、教育現場の課題があるようにも思えた。

## 更新講習のグループ支援者になって

岩澤 啓子

### 1 グループ支援者としての準備

必修講習のグループ支援者を依頼されたまではよかったのですが、関係者が集まって模擬講習を開くことになり、私も受講者と同様「教育の省察」をテーマとするレポートを作成することになりました。まさか、レポートを作らされるとは…仕方なく私は『公立中学校教員経験のフィルターを通して見た大学と大学生』のテーマでレポート2枚にまとめました。しかし、このことは私にとって改めて日頃の任務を見直す契機になったと同時に、受講する教員の気持ちを付度できたこと、またグループ支援者としての認識と自覚を深められたと思っています。

### 2 異校種異年齢のグループ討議の難しさ

グループ構成は、小・中・高校の年齢や教科も異なり、養護教諭も含まれる6人です。受講者の立場や学校環境が異なり、興味や関心が必ずしも共通ではないので、司会進行役の努力なしでは討議が形式化してしまう心配がありました。これを克服するためには、まず私が6人の“振り返り”に強い興味と関心を抱き、自らのモラルを高めて討議に臨むことだと気づかされました。

### 3 二日間で築かれた「同じ釜の飯を食う仲間」意識、豊かな気づき

始めるに当たって、内容は守秘義務を要するものがあること、討議は異校種の学校環境に関心を持ち、互いに深められるような発言に努めることなどをお願いしました。私がグループ支援者なら、受講者6人それぞれ発表者の支援者になっていただくのです。その結果、「同じメンバーで討議を行えたこと。その中からたくさんのヒントや元気（前向きな気持ち）をもらえたのが、この講習をうけてよかったことです。」と述べた教員の気持ちに凝縮されているように、強い仲間意識が出来上がり心の繋がりを見出したようです。

小学校の教員は、中・高校の教員の話をとおして小学校で何をすべきか、中・高校の教員は、子どもの成長過程の実態を知り、これからの教育の資を得たとのことでした。或る若い先生が「大変なのは自分だけではなく、誰もが大変なところを乗り越えたり、今も問題意識を持ち続けているのを知り、自分の肩に重くのっていたものが随分軽くなりました。誰もが苦労を経ていることを理解できると心が開かれ、一人ではないことに気づきうまく先生方と連携できそうな気持ちになります。」と感想を述べていました。

受講者の「分かった」ことへの喜びが直に伝わってきた久々の新鮮な体験は、教職課程における学生教育に如何に生かしていくかがこれからの私の課題であると思いました。

## グループディスカッションの記録

萩野佳代子

グループディスカッションはまず、各先生方が「教職生活の振り返り」について話をされ、その後自由にディスカッションをする形で進められた。私達のグループで特に話題となったのは、「現在の課題」として挙げた、観点別評価や二期制の導入など新しいシステムを現場で導入、運用するうえでの困難や疑問点についてであった。先生方はこれらについて共感したり、困難に対処する上での具体的な工夫を紹介しあったりしていた。特に先生方は校種や担当教科がそれぞれ異なるため、ある先生が疑問に感じていることに対し、他の先生は「(その場に適した) 直接的な問題解決法」とは異なる、少し違った角度からの話をされることになる。このことが先生方にとっては逆に新鮮であり、問題意識を共有するだけでなく、さらには問題を俯瞰して「教育とは」「教員のあり方とは」といった、より根源的な問題を考える契機にもなっていたように思われた。

ディスカッションを伺っていて私が感じたことは、先生方にとっては日々の、一見ささいな出来事や問題に関する情報を交換できる場が実は大切なのではないかと、ということである。「こういう時どうしたらよいのだろう」という疑問は特に新しい仕事や場面では必ずあると思うが、普段は「忙しい他の先生の時間を割いて『相談』するほどでもないし」などと胸にしまっておくことが多いのではないだろうか。今回は、それを気兼ねなく出しあえたことが、先生方にとって個々の問題解決にとどまらない意味を持ち、後に「自由に話ができよかった」、「校種や担当教科が違ってても違和感なく話ができたと振り返られていたことにつながるように感じた。

一方私は当初「教職生活の振り返り」の後は、各先生方が時間軸(ライフスパン)でキャリアを見渡しての話し合いになるかと考えていたが、実際この話題は少なかった。それには、グループ支援者である私に教職経験がないことを含め、私の力量不足によるものではなかったか、反省をしている。もしそうした話し合いになった場合には、出された論点を整理し、論点別に議論を深めることもできたであろう。例えば私達のグループには、育児・介護との両立を経験されている方が多く、この点に絞るといった方法もあったと思われる。ただし、論点別に議論を深める時には、それに関心のある者同士、あるいは同じ年代同士など、グループを組み替えて議論をするとより効果的かもしれない。

今回、私にとっては現場の先生方の経験をお伺いする貴重な機会となった。ディスカッションの中ではコーディネーター役をしつつ、一方大学生と向き合う教員として話に参加したい、しようとする自分がいた。グループの先生方には、支援者である私にも、教育について考え成長する機会を与えて頂いたことを心より感謝している。